

# 俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について(二)

程 正

## 一、はじめに

筆者はかつて個人の知りうる範圍で蒐集した俄藏の禪籍の一部を、『俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について』(以下、前稿)と題して紹介したのであるが、すでにその結びにおいて關説したように、それは決して俄藏敦煌文獻にある禪籍のすべてを網羅したものではない。すなわち、その後、『俄藏敦煌文獻』(以下、『俄藏敦煌』)の中にある神會關係のものをはじめとする一部の禪籍については、すでに論じられていたことが判明され、また拙稿とほぼ同じ時期に、もっぱら『俄藏敦煌』の禪籍を中心に考察したすぐれた研究成果が公にされていたこと<sup>5</sup>もあり、さらに拙稿を發表した後、新たに數種の禪籍の存在も確認されたことを受けて、ここに續篇として考察を試みたのが本小論である。

以下、箇箇の禪籍の紹介に入るが、その分類方法や順序などについては、前稿と同様に、かつて田中良昭氏がされた分類に従うものとする。すなわち、(一)傳燈・嗣承に關する文獻、(二)禪法・修道に關する文獻、(三)銘・箴・讚・偈類、(四)教理問答・綱要書類、(五)經注・經序類、という五項目の分類順に紹介していきたい。なお、筆者の構想としては、その存在が知られるようになった禪籍をそのつど紹介し、最終的には『俄藏敦煌』の禪籍に關する目錄の作成を目指すものであるが、そのためには、他の研究者によってすでに紹介されたものに關しても、すべて小論に取り入れ、その文獻の發見された経緯などについても紹介することにした。目錄の作成は、とうてい筆者一人ではなしえないものであり、諸賢のご教示を乞う次第である。

二、『俄藏敦煌文獻中から発見された禪籍について(承前)

(一)『楞伽師資記』(斷片、二種)

『俄藏敦煌』における『楞伽師資記』のテキストについては、前稿で ○一七二八號と ○五四六四號、○五四六六號の二種の存在を紹介したのである。<sup>7)</sup>ところが、○一七二八號については、すでに中國人學者の榮新江氏によってその存在が指摘されており、その論文は衣川賢次氏によって日本語譯もなされている。<sup>8)</sup>また、中西久味氏も前稿で紹介した ○一七二八號と ○五四六四號、○五四六六號についての紹介をされており、しかも中西氏は、これらの三種とは別に、新たに ○八三〇〇號と 一八九四七號Rの二種の存在を指摘されたのである。<sup>9)</sup>すなわち氏の論文によれば、次の二種があるという。

1、○八三〇〇號(斷片)

2、一八九四七號R(斷片)

しかもこの二種は、もと同一文書である可能性が高いといひ、氏によって示された本文の内容を示せば、次の通りである。

一八九四七號R

○八三〇〇號

1 【斷缺】略辯大乘入道四行 弟子曇林序【斷缺】

2 【斷缺】婆羅門國王第三之 子也神應 【斷缺】

いずれも野入りの紙に書寫された斷片であるが、○八三〇〇號にはわずかに九字が、一八九四七號Rには一六字が存するのみである。なお、中西氏は兩者を接合させることによって比定された結果、もとの寫本は一行が二五字程度のものであったという。

(二) 『蕪州忍和上導凡趣聖悟解脫宗修心要論』(斷簡、一種)(以下、『修心要論』)

『修心要論』については、前稿で關説したように、『俄藏敦煌』にはすでに「二七七」(〇〇六四九號Ⅴ)と「二六四二」(〇一九九六號B、〇二〇〇六號B)の二種が存在している。『修心要論』に關連する内容については、〇〇六四九號Ⅴ(斷簡)は、わずかに「導凡趣聖悟解脫宗修心成佛要論」のタイトルとその下に記されている「蕪州忍禪師 譯」のみであり、一方の 〇一九九六號B、 〇二〇〇六號B(斷簡)は、補修材料として利用された同じテキストの違う部分で、およそ三五字前後の斷簡である。

今回、筆者は『俄藏敦煌』から新たに『修心要論』の尾部に相當するテキスト一種を發見した。すなわち、〇五九五五號(斷簡)である。この文獻は『俄藏敦煌漢文寫卷紋録』(上、下二卷)(以下、『紋録』)にも收録されていないため、『俄藏敦煌』に掲載された一枚の寫眞以外には、それを知るすべがない。

まず田中良昭校訂本をベースにその全文を示せば、次の通りである。なお、字數を比定するために、句讀點を省略した。

- 1 無明昏住 又不當理只欲不正心不緣義即妄取空
- 2 雖受人身行畜生行爾時無有定慧方 便而不能得了明見佛性只是行
- 3 人沈沒之處若爲進起得到無餘涅槃 願示眞趣 答曰會是信心具
- 4 足至願成就緩緩靜心更重教汝好自閑 淨身心一切無所攀緣端坐正
- 5 身令氣息調愆其心不在内不在外不在 中間好好如如穩熟看即及見
- 6 此心識流動猶如水流陽焰葉葉不住既見 此識時唯是不内不外緩緩
- 7 如如穩看熟即返覆融消虛凝湛住其 此流動之識颯然自滅滅此識
- 8 者乃是滅十地菩薩衆中障惑此識身 等滅已其心即虛凝淡泊
- 9 皎潔泰然吾更不能說其刑狀汝若欲得知 者取涅槃經金剛身品及
- 10 維摩經見阿閼佛品緩緩專思此是實 語能得於行住坐臥中及對

俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について(二)(程)

- 11 [五] 愆八風不失此心者是人梵行已立所作已 辨究竟不受生死之身五愆者  
12 [色] 馨香味觸八風者利裏毀譽稱讚苦樂 [此] 是行人磨鍊佛性處甚  
13 莫怪今身不得自在經曰世間無佛住地菩薩 不得現用要脫此報身  
14 衆生過去根有利鈍不可判上者一念間下者 無量劫若有力時隨衆生性  
15 起菩薩善根自利利人莊嚴佛道要須了四依 乃窮實相若依文  
16 執即失眞宗諸比丘等學他出家修道此是出家出 [生] 死家是名出家  
17 正念具足修道得成乃至解身支節臨終命時不失正念即 [是] 佛弟子  
18 上來集此論者直以信心依文取義作如是說者實非了了證知若乖聖  
19 理者願懺悔除滅若當聖道者迴施衆生願皆識本心一時成佛聞者  
20 努力當來成佛願在前度我門徒 問曰此論從首至末皆顯自心是道  
21 未知果行二門是何門而攝 答曰此論顯一乘爲宗然其至意導迷  
22 趣解自免生死乃能度人直言自利不說利他約行門攝若有人依文行  
23 者即在前成佛若我誑汝當墮十八地獄指天地爲誓若不信我世世  
24 被虎狼所食

前記の如く、〇五九五號は『修心要論』の尾部を書寫した斷簡であるが、尾題は存在しない。しかも殘存する二四行のうち、一行目から一七行目までは下半分の損傷が著しい。一八行目から二四行目までの内容は辛うじて保存されている。これらの行から推察するならば、本來このテキストは、一行およそ二八字で書寫されていたことがわかる。

(三)『頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決』(斷簡、一種)(以下、『要決』)

現在の學界においては、從來「南頓北漸」と呼ばれてきた圖式に反して、南宗のみならず北宗においても、かつて頓悟を主張した一派が存在したと考えられるようになってきている。そのきっかけとなったのは、『要決』と『大乘開心顯性頓悟眞宗論』(以下、『眞宗論』)の二種の北宗禪文獻の発見である。その経緯の詳細については、田中良昭氏の「敦煌の禪籍」に詳述されており、それに譲るが、敦煌禪宗文獻である『要決』のテキストの情況について紹介しておく。

『要決』の存在をいち早く學界に紹介したのは、柳田聖山<sup>15)</sup>である。柳田氏の指摘によってその存在が明らかになったのは、P二七九九號とS五五三三號である。P二七九九號は「頓悟眞宗金剛般若修行達彼岸法門要決」という首題を有しながらも、途中で欄筆し、その後半部分に「觀世音菩薩祕密藏無障礙如意心輪陀羅尼經」と題する經典が連寫されたものである。一方、S五五三三號は、『要決』の途中からの書寫であるが、しかしその後半部分は斷缺している。前述のP二七九九號の内容とは重複しないものの、幸い兩者の内容はほぼそのまま結合することが可能である。しかもその後、P三九二號にも『要決』の斷簡が含まれていることが指摘された。P三九二號の『要決』は、貝葉式梵本で横書きのものである。偏經の『法句經』に連寫されたものであり、首題は『頓悟眞宗要決』で、それに續いて「侯莫陳琰問、智達禪師口決」とあるが、残念なことにこのテキストは、わずか二紙四頁のみの斷簡である。<sup>18)</sup>

ところで、『俄藏敦煌』にも、『要決』のテキスト(斷片)の存在していることが筆者の調査によって明らかになった。すなわち、『〇五八三〇號(斷簡)<sup>19)</sup>である。これも『敘録』には収録されていないものであるから、以下に上山氏の校訂本(以下、上山本)と比較しながら、全文を示しておく。ただし、兩者の異同についてはゴシック體で傍線を附して表し、缺損した部分を【】でかこみ、数字は行數を示す。以下の凡例は、これに準ずる。

『要決』本文(〇五八三〇號)

『要決』本文(上山大峻校訂本)<sup>20)</sup>

【前缺】

1 大宅、棄之走【斷缺】

有清淨大宅、棄之走向他國。後歸本國、宅舍荒穢、心中

俄藏敦煌文獻中に発見された禪籍について(二)(程)

- |   |                 |                            |
|---|-----------------|----------------------------|
| 2 | 不認、乃向洛陽道上、五【斷缺】 | 不認、了向洛陽道上、五谷澗逼、三壕上側、造一草菴、隨 |
| 3 | 時作活、後逢善知識、指【斷缺】 | 時作活、逢善知識、指示本宅在長安極清淨。汝今     |
| 4 | 在此艱辛、遂即取語、逐【斷缺】 | 在此艱苦、遂即取語、善知識、往自長安、一依指授、自  |
| 5 | 本宅、細看多日、忽然【斷缺】  | 求本宅、細看多日、忽然省得。智本宅荒穢        |
| 6 | 時、即修堂屋、未成就。【斷缺】 | 多時、即修堂屋、未成就。且向草菴邊寄住、時住本    |
| 7 | 營造。後宅舍成就、移向【斷缺】 | 宅營造。後宅舍成就、移向長安宅中。          |
| 8 | 【後缺】            | 其五谷草菴                      |

上記の通り、○五八三〇號の『要決』のテキストは、寫眞一枚に收められたわずか八行の斷片である。このうち、起首部分の殘されている二、三、四行目を基準に上山本の該當部分と照合してみれば、もともと一行に約二〇字前後で書寫されたテキストであることが推定されよう。また ○五八三〇號の出現によって、從來判然としない二行目、三行目の意味が明らかとなった。

(四)『絶觀論』(斷簡、四種)

初期禪宗の一派である牛頭宗の綱要書とされる『絶觀論』は、敦煌文獻しか存しなかつた貴重な禪籍で、漢文文獻に限つていえば、從來六種(P二〇四五號、P二〇七四號、P二七三三號、P二八八五號、閩八四號、石井積翠軒舊藏本)の存在が確認されていたが、近年、西脇常記氏によつてドイツ所藏の敦煌文獻にも一種(Ch一四三三號)の存在が指摘されている。これらのうち、最初の六種の敦煌本の書誌學的研究は、すでに柳田聖山氏によつてなされている。氏の研究によれば、これらの六種には、それぞれ二種ずつ三つの系統が存在するという。しかし、俄藏の敦煌文獻にも『絶觀論』(斷簡)に四種の存在することが、中西久味氏によつて報告された。中西氏の敘述に基づいてこれらの四種の内容を示せば、下記の通りとなる。

1、 ○四二五九號（斷簡）<sup>(2)</sup>

○四二五九號は、薄い罫入りの紙に、一行一六字前後で書寫された斷簡である。内容的には、かつて柳田氏による分段からすれば、第二段の末から第三段の前半部分に相當する。柳田本と對照すれば、次の如くである。

○四二五九號（中西本）

柳田聖山校訂本

1	者、造作非眞。問曰、究竟云何。	若修成得者、造作非眞。問曰、究竟云何。
2	答曰、離一切限量分別。於是緣門復起。	答曰、離一切限量分別。緣門
3	問曰、凡夫有身、亦見聞覺知、聖人有	問曰、凡夫有身、亦見聞覺知、聖人有
4	身、亦見聞覺知。中有何異。答、凡夫	身、亦見聞覺知。中有何異。答曰、凡夫
5	眼見耳聞、身覺意如知。聖人即不爾。見	眼見耳聞、身覺意如知。聖人即不爾。見
6	非眼見、乃至知非意知。何以故、過一切限量	非眼見、乃至知非意知。何以故、過一切限量
7	故。問曰、何故經中復說聖人無見聞覺	故也。問曰、何故經中復說聖人無見聞覺
8	知者何也。答曰、聖人無凡夫見聞覺知、非	知者何。答曰、聖人無凡夫見聞覺知、非
9	無聖境界者。非有無所攝、離分別。問曰、	無聖境界。非有無所攝、離分別故也。問曰、
	（後缺）	凡夫實有凡境界耶。

中西氏によれば、○四二五九號の『絶觀論』テキストは、P二〇七四號、P二八八五號と同じ系統のもので、P二八五五號にほぼ一致しているという。

- 2、 ○五八八一號（斷簡）  
 3、 ○六二三〇號（斷簡）<sup>(2)</sup>

○五八八一號と ○六二三〇號は、もともと同一寫本で、しかも兩者を完全に結合することができる。まず ○五

俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について（二）（程）

八八一號は六行の斷簡であり、〇六二三〇號は一六行の斷簡である。中西氏は兩者の結合を試みられ、その本文がP二〇四五號、閩八四號の系統に屬するものであるとした。また本文の内容については、柳田氏の分段の第一段の未から第二段に相當していることを指摘されている。兩者のテキストの復元は、既に中西氏によってなされており、今はそれに譲りたい。

4、〇八七六八號(斷片)<sup>(26)</sup>

〇八七六八號はわずかに「絶觀」の二文字と「論」という字の上半分しか残されていない碎片である。

(五)『三寶四諦文』(斷簡、二種)

かつて鈴木大拙氏によって、「三寶問答」の擬題<sup>(27)</sup>と呼ばれ、後に田中良昭氏によって『三寶四諦文』<sup>(28)</sup>に統一された、「三寶」、「四諦」に關する問答體のものである。このテキストについては、田中氏の研究によれば、鈴木氏が紹介した龍谷大學圖書館所藏『西天竺三國沙門菩提達摩禪師觀門法大乘法論』(以下、龍谷本『觀門法大乘法論』)とS二六六九號にそれぞれ含まれている二種に、田中氏が発見したS一六七四號、S二九二八號、S四二三六號、S六一〇八號、P二四三四號、P三四五〇號、P四六二七號、人七二號の八種を加えて、都合一〇種の存在が確認されている。各おののテキストの紹介は田中氏が詳述されており、それに譲りたい。<sup>(29)</sup>

ところで、筆者が『俄藏敦煌』を新たに調査したところ、この『三寶四諦文』と思われる斷簡に、二種の存在を確認することができた。すなわち、〇二〇七八號(M二六四四號)と 〇六二五五號である。

1、〇二〇七八號(M二六四四號、斷簡)

このテキストについては、『紋録』(下卷)に、次のように紹介されている。

問答式經卷、解釋佛教用語…別相。

殘卷、14×11。1紙中部殘片。7行、不全。紙色褐、紙質厚而硬、網格大。楷書。無題字。(9 11世紀)



從「……答「僧」……到「……名別相……」。(三七三頁)

鈴木氏の校訂したテキストと比較してその内容を示せば、下記の通りである。なお、波線の部分は新出の  
に存する部分であることを意味する。 ○二〇七八號

○二〇七八號(傍線は筆者)

鈴木大拙校訂本(波線は筆者)

1 【前缺】 答僧【斷缺】	又問云、何無違詩。答、僧者、和合義。謂法身體中無違詩。
2 【斷缺】 爲僧【斷缺】	又問、何名一體。答、三寶名殊、其體不異、故名一體。又問、何以得知一體三寶。
3 【斷缺】 即是【斷缺】	答、名殊其體是一。維摩經云、佛即是法、即是衆。是三寶皆無爲相、與虛空等。
4 【斷缺】 名一體 問何名別相三寶 答【斷缺】	細此義邊。故名一體。問、何名別相三寶。答、丈六化身、以爲佛寶。所說言教、以爲法寶。大乘十信已上、爲僧寶。又問、何名別相。
5 【斷缺】 法寶大乘十信已上 <small>小乘初</small> 【斷缺】	答、一一相殊、故名別相。問、云何一一相殊。答、佛不是法。法不是衆、形狀不同、故名別相。
6 【斷缺】 一一相殊故名別相 問云何一一【斷缺】	
7 【斷缺】 故名別相 【後缺】	

新たに發見された ○二〇七八號の二行目、五行目の二箇所に鈴木大拙校訂本との相違のあったことが、これで明らかとなった。

2、 ○六二五五號(斷簡)

このテキストについては、『紋録』にも含まれていないため、掲載されている寫真一枚以外には、詳細な書誌的情報は知る

俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について(二)(程)

すべがない。この寫眞によつて紹介すれば、一六行の斷簡で、天頭は殘されているものの、地脚の損傷が激しく、最後の四行の下部が完全に斷裂している。

鈴木大拙校訂本と對照してその内容を示せば、下記の通りである。

〇六二五五號(傍線は筆者)

鈴木大拙校訂本(波線は筆者)

【前缺】

- 1 益流出無量功德【斷缺】
- 2 三寶有幾種 答有三種 問【斷缺】
- 3 三寶 別相三寶 住持三寶 是名【斷缺】
- 4 一躰三寶 答法身躰有妙覺名【斷缺】
- 5 妙軌名爲法寶 法身躰離無違【斷缺】
- 6 問何名妙覺 答妙者神用不測【斷缺】
- 7 法身躰中有覺了之性故云妙覺【斷缺】
- 8 答軌者軌則之義以法身 中有【斷缺】
- 9 問何名無違諍 答僧者合【斷缺】
- 10 故無諍故言躰無違諍【斷缺】
- 11 三寶名殊其躰不異故名【斷缺】
- 12 殊其躰是一 答維摩經云 即是【斷缺】
- 13 寶皆無爲相與虛空等約此義【斷缺】
- 14 何名別相三寶 答丈六化身以爲【斷缺】
- 15 以爲法寶大乘十信已上小乘初果【斷缺】
- 16 問何名別相 答一一相殊故名別相【後缺】

- 問、每闍歸依三寶。問曰、何者是三寶。  
 答、佛寶・法寶・僧寶、是名三寶。又問、  
 三寶有幾種。 答、三寶有三種。 又問、何者三種。 答、一體是  
 三寶、別相三寶、住持三寶、是名三寶。又問、何者是  
 一躰三寶。 答、法身躰有妙覺、以爲佛寶。法身體  
 妙軌、以爲法寶。法身躰離無違諍、以爲僧寶。又  
 問、何名妙覺。 答、妙神用不測、稱之爲妙覺者、以  
 法身躰中、有覺了之性故、故云妙覺。又問云、何名爲妙軌。  
 答、軌者軌則之義。以法身躰中有妙軌持義故、故云妙軌。又  
 問云、何無違諍。 答、僧者合和義。謂法身體中  
 故無諍。故言躰無違諍。又問、何名一體。 答、  
 三寶名殊、其躰不異。故名一體。又問、何以得知一體三寶。 答、名  
 殊其躰是一。』維摩經云、佛即是法、即是衆。是三  
 寶皆無爲相、與虛空等。細此義邊、故名一體。又問云、  
 何名別相三寶。 答、丈六化身以爲佛寶。所說言教、  
 以爲法寶。大乘十信已上以爲僧寶。又  
 問、何名別相。 答、一一相殊、故名別相。

〇六二五五號の一行目に存在する「益流出無量功德」の一句が鈴木校訂本には存しないが、これさえ除けば、鈴木大拙校訂本とは、多少の文字の出入はあるものの、同じ系統の寫本であることが認められよう。さらに、もし筆者の比定に大差がなければ、この寫本はもともと一行に一八字前後で書寫されていたと考えられる。

(六) 智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』(斷簡、六種)(以下、『智詵疏』)

四川に展開した初期禪宗の一派である淨衆・保唐宗の祖と仰がれた智詵には、『般若心疏』一卷という著作があったとされている。

この『般若心疏』とは、敦煌から発見された智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』のことである。この『智詵疏』に關する先行研究については、かつて拙稿「智詵撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究(一)」<sup>33)</sup>で詳述しており、それに譲りたい。ここでは、そのテキストの情況のみに絞って紹介しておく。

最初に『智詵疏』のテキストを校訂されたのは、柳田聖山氏<sup>34)</sup>である。すなわち、柳田氏はP四九四〇號、北爲五二號、P二一七八號、北關九號、S八三九號の五種の『智詵疏』のテキストを紹介して、最初の二種を底本に、後の三種を校本として、『智詵疏』と關連性のある慧淨撰『般若波羅蜜多心經疏』(以下、『慧淨疏』)の續藏本、S五八五〇號、北崑一二號の三種と龍谷大學藏『般若波羅蜜多心經疏』<sup>35)</sup>の計四種の文獻を参考に用いてテキストの校合を試みられたのである。

一方、中國人研究者の方廣錫氏は、柳田氏が紹介された五種のテキストのほかに、新たにP三二二九號、S七八二號の二種を発見し、S七八二號を除くこれらの六種を用いて新たに『智詵疏』のテキスト校合をされた。<sup>37)</sup>

また、同じ方氏の編著になるスタイン本六九八一號、八四〇〇號の目録である『英國圖書館藏敦煌遺書目録』斯681號、斯840號(以下、『方録』<sup>38)</sup>)によれば、スタインコレクションにはもう一つ『智詵疏』のテキストの存在が知られるのである。すなわち、S八三五一號(斷簡)である。このテキストの書誌情報は、『方録』が次のように敘述している、

1、斯08351號 般若波羅蜜多心經疏(智詵)

2、41.4 × 12.7、共34行。

俄藏敦煌文獻中に発見された禪籍について(二)(程)

俄藏敦煌文獻中に発見された禪籍について(二)(程)

三八八

紙。

首尾均残、上下均残脱、卷面残損、近年已封入硬塑片中、無烏絲欄、已折痕代之。有硃筆點標。

背面亦有文獻、共26行、編作08351V。

3、首殘『集成』<sup>(38)</sup>、251/15。

尾殘 253/11。

(中略)

11、本件與伯3229號原屬同一文獻、已殘爲二件、中有缺漏、尚無法綴接<sup>(39)</sup>。

方氏の解題によれば、S八三五一號は、かつて方氏本人が紹介したP三三二九號と同一寫本ではあるものの、なお缺損した部分があるため、結合することはできないという。

これらに對し、筆者は『俄藏敦煌』の中から、新たに『智詵疏』の斷簡六種、すなわち ○〇二九〇號、○〇三八五

號、○一一八三號<sup>(41)</sup>、○六一四八號、○六一四九號<sup>(42)</sup>、○五五八三號<sup>(43)</sup>Vの存在を確認したのである。以下それらに

ついて紹介しよう。

1、○〇二九〇號(斷簡)

2、○〇三八五號(斷簡)

3、○一一八三號(斷簡)

まずこれらの三種は、三つの編目番號を持っているが、寫眞四枚に收められている状態からすれば、元來同じ寫本が分斷されたものであることが判る。『敘録』では、M一一三四號として編目されている。薄い野入りの紙に書寫されたものであるが、保存状態はかなり悪く、特に紙の下半部の損傷が著しい。これらの斷簡の書誌的特徴については、『敘録』(上卷)に、次のように述べられている。

問答式專題論文、内容は論因果及涅槃。

同一寫卷的2件殘卷、彼此不相連貫…(1) 90 x 28。部分手卷、首尾缺、有破洞、下面邊沿殘。3紙、第1紙不全。71

行、毎行<sup>28</sup> 33字。(1) 17×28。部分手巻、首尾缺、下面邊沿殘。1紙、不全。13行、毎行30 32字。紙色白、紙質薄。僅劃邊框線。行草。無題字。(10) 11世紀)

(下略)(四三九頁)

一方、『智誦疏』の内容からすれば、これらの三種のものは二分することができる。すなわち、第一部分は、『心經』本文の「無眼界乃至無意識界」の注釋の「(前缺)以破我者、若眼中有我……」から、「……轉七識爲平等性智。八識不(後缺)」までの約二三行であり、第二部分は、『心經』本文の「亦無無明盡、乃至無老死亦無老死盡」から、『心經』本文の「菩提薩埵……」の直前の「總明三乘境觀俱空分。(後缺)」までの斷簡である。

4、 ○六一四八號(斷簡)

5、 ○六一四九號(斷簡)

これらの二種も、寫眞一枚に收められている状態からすれば、元來同じ寫本に屬するものであると考えられる。『敍録』にも收録されていないから、その確な書誌的情報はわからない。僅かにその一枚の寫眞から推定するならば、現存部分は、薄い野入りの紙に、一行約三〇字前後で、約一六行にわたって書寫されたものであるが、保存状態がかなり悪く、特に斷簡の後半部分の下半部の損傷が著しく、一六行のうち、最後の二、三行はわずか一〇字弱しか残されていないのである。

『智誦疏』の内容からすれば、これらの二種のもは、『心經』本文の「無眼界乃至無意識界」の注釋の「(前缺)受薰、即如來藏。淨轉八識。爲大圓鏡智……」から、『心經』本文の「無無明亦無無明盡、乃至無老死亦無老死盡」の注釋の「……乃至無老死亦無老死盡者、即(後缺)」までの斷簡である。

6、 ○五五八三號V(斷簡)

この一種は、寫眞一枚に收められている。『敍録』にも收録されていないので、寫眞から推定すれば、地脚が缺損しているために、斷簡自體では一行あたり約一六字しか残されていないが、幸いなことに天頭は缺損してはいるものの、その損傷は本文の文字には達していないから、『智誦疏』の本文内容との比定により、本來一行に約三〇字で書寫されていたことが判明し

た。

『智誦疏』の内容からすれば、『心經』本文の「無眼耳鼻舌身意、無色身香味觸法、無眼界乃至無意識界」の注釋の「(前缺)諸識無生滅、即名無願門。……」から、「……」から、「……」故知、所緣六塵皆不實。故云、無色聲香味觸法。若小乘之人、緣會則諸法生、緣(後缺)「までの約二十七行の斷簡である。

以上を總合すると、現在のところ、敦煌文獻から發見された『智誦疏』のテキストは、次の一四種となる。すなわち、最初に柳田氏によって紹介された、

- 1 P 四九四〇號
- 2 北爲五二號
- 3 P 二一七八號
- 4 北闕九號
- 5 S 八三九號
- 6 P 三二二九號
- 7 S 七八二號
- 8 S 八三五一號
- 9 ○〇二九〇號
- 10 ○〇三八五號
- 11 ○一一八三號
- 12 ○六一四八號
- 13 ○六一四九號

の三種と、さらに筆者が新たに發見した、

の五種と、次に方廣鉛氏によって紹介、編録された、

の六種で、合わせて一四種となる。前述したように、これらの俄藏敦煌文献六種のうち、○五五八三號Vは獨立した斷簡であるのに對し、○〇二九〇號、○〇三八五號、○一八三號の三種と○六一四八號、○六一四九號の二種は、それぞれ元來同一寫本の異なつた部分の斷簡である。

## (七)『法王經』(斷簡、三種)

沖本克己氏が精力的に取り込まれた研究成果<sup>(44)</sup>によれば、禪系の偽經とされる『法王經』のテキストとして現在知られているものは、次の如くであるという。

- 1、敦煌出土漢文『法王經』
- 2、敦煌出土西藏文『法王經』
- 3、西藏大藏經入藏本『正法王大乘經』<sup>(45)</sup>

本小論に於いては、その第一部分の漢文テキストに焦點を當てて見ることにしたい。

敦煌から發見された『法王經』の漢文テキストは、從來矢吹慶輝氏、岡部和雄氏らの指摘や『敦煌遺書總目索引』(北京、一九六二年、四一五頁)などによつて四種の存在が知られていた。即ちS二六九二號<sup>(46)</sup>、目三〇號、淡三六號、鹹二六號の四種である。それらに加えて、沖本氏は北京の敦煌遺書コレクションから新たに北京新本二二九八號と北京新本〇九〇〇號の二種の存在を發見され、特に二二九八號は首尾完全な良本であることを指摘されている。

更に、筆者が『方録』を調査したところ、スタインコレクションに新たに『法王經』(斷簡)一種の存在することが明らかとなつた。すなわち、S七二六九號である。このテキストの基本的な書誌情報については、『方録』に次のように紹介されている。

- 1、斯07269號 法王經
- 2、55.5×20' 共33行。

俄藏敦煌文献中に發見された禪籍について(二)(程)

紙。

首尾均殘。通卷下半殘缺。近年已通卷托裱、并接出護首、拖尾。有烏絲欄。

3、首殘 大正 22883、85/1388A9

尾殘 85/1388B12\*

8、唐(下略)<sup>(48)</sup>

ところで、『俄藏敦煌』にも『法王經』の斷簡(三種)の含まれていることが、中國人研究者である勝義氏の研究<sup>(49)</sup>によって明らかになっている。すなわち、○五〇八〇號、○五三三八七號、○五五二三號の三種である。

1、○五〇八〇號

まず、勝義氏のとめた内容をみてみよう。

案：是片爲佛教典籍。殘片、存文字八行半。行三至十五字不等、楷書工整。録寫佚著者『法王經』、自「(一)風嚙斷(心根)」至「多作惡業」。經見<sup>(50)</sup>785p1387a11以下、所見文字略異。(下略)

勝義氏の指摘されたとおり、現存のテキストは、一行に三丁一五字で書かれてはいるが、テキストの原文からすれば、もと一行に一七字で書寫されていたことが推定されよう。つまり、嚴格に經典扱いにされていることになる。沖本氏による校訂本と比較すれば、次の如くなるう。なお、兩者に見られる文字の出入に傍線を附した。

○五〇八〇號

沖本校訂本

1	【前缺】風嚙斷【斷缺】	四蛇牽引爲諸妄想。二風嚙斷心根。猶如有
2	【斷缺】毒向之【斷缺】	人繩懸在樹。四蛇在下吐毒向之。樹上二風嚙
3	【斷缺】即三業淨。若心不【斷缺】	繩欲斷。若心滅即三業淨。若心不滅眼色與心
4	【斷缺】見所縛將墮地獄。爾時一聞	俱爲妄想。爲見所縛將墮地獄。爾時一聞
5	【斷缺】聞法。於一念中心生慚愧。欲問如來	提因佛聞法。於一念中心生慚愧。欲問如來憐



- 6 【斷缺】之法。心懷慚愧不能發問。如來神通即
- 7 其意。欲令是人離諸苦惱出地獄業【斷缺】
- 8 空藏菩薩言。於我涅槃後。若 【斷缺】
- 9 【多惡業滅】後缺】

悔之法。心懷慚愧不能發問。於時如來以神通即知其意。欲令是人離諸苦惱出地獄門故。語虛空藏菩薩言。善男子於我涅槃後。若有一闍提之人多作惡業。滅(後略)

2、 ○五三八七號

○五三八七號については、勝義氏は次のように説明している。

案：是片爲佛教典籍。殘片、上尚完整。存文字十五行、行五至十字不等、楷書。録寫「法王經」、自「衆信衆皆在」至「汝等皆當(一心)」。經見(TSUNO, 2883p1384c05至c18。所見文字有異。(中略)「大正藏」闕文甚多、可據是片補之。(下略)このテキストは、地脚を含む下半部が破損しているもの、天頭部分がかろうじて残っているから、沖本校訂本と比較すれば、もともと一行に一九字前後で書寫されていることが比定される。また、その内容は「法王經」の冒頭部分にあたり、これを具體的に示せば、次の通りになる。

○五三八七號

沖本校訂本

- 1 【斷缺】萬億衆皆在【斷缺】
- 2 目不暫捨。於時如來【斷缺】
- 3 空。於其光中現一【斷缺】
- 4 曰虚空藏菩薩即【斷缺】
- 5 面。五體投地悲泣流【斷缺】
- 6 欲入涅槃。時欲將至。【斷缺】
- 7 衆生多作惡業專行十惡。【斷缺】
- 8 於佛所說十二部經甚【斷缺】

萬億衆皆在樹下邊佛而坐。瞻仰尊顏目不暫捨。於時如來以神通力。放光大光明。遍照虚空。於其光中現一切法。爾時衆中有一菩薩。名曰虚空藏菩薩即從坐起。繞佛三匝却住一面。五體投地悲泣流涕而白佛言。天中尊如來欲入涅槃。時欲將至。若滅度後千五百歲。五濁衆生多作惡業專行十惡。如此衆生福德力薄。於佛所說十二部經甚深妙法多文廣義意趣

俄藏敦煌文獻中に發見された禪籍について(二)(程)

- 9 難解。於【法中不可披擯】【斷缺】
- 10 定眞實。令此衆【斷缺】
- 11 愈。佛告虚空藏菩薩【斷缺】
- 12 能爲諸衆生問如是事。得【斷缺】
- 13 爲汝分別宣說眞實大乘【斷缺】
- 14 生故。令諸衆生離煩惱故【斷缺】
- 15 解脫超生死故。汝等皆當【斷缺】

- 難解。於其法中不可披擯。願佛慈悲爲說大乘決定眞實。令此衆生得眞妙藥。療諸毒病悉令得愈。佛告虚空藏菩薩。善哉善哉善男子。汝能爲諸衆生問如是事。得大利益不可思議。我當爲汝分別宣說眞實大乘決定了義。何以故。度衆生故。令諸衆生離煩惱故。出地獄苦生淨土故。必定解脫超生死故。汝等皆當

3、 ○五五二三號

○五五二三號については、勝義氏は次のように説明している。

案：是片爲佛經典籍。殘片、且僅存中部。楷書甚上、存文字二十三行、行六七字不等。録寫佚名『法王經』、自「一切衆生皆一乘故」至「(内禪眞)實清淨(金剛)」。經文見Ts'da1389c09~1390a10、是片所見文字略異：是片「無一法不知」、<sup>(82)</sup>『大正藏』作「不法不知」。

このテキストは、天地ともに缺けるものであるから、元來の形態の推定は極めて困難である。假に現存している各行の第一字を基準にして沖本校訂本の該當部分と比較してみると、おそらく一行に二〜二十七字で書寫されたものであると比定されよう。また、その内容は『法王經』の末尾に相當するもので、これを具體的に示せば、次の通りになる。なお、字數の比定のために、句點を省略した。

○五五二三號

沖本校訂本

- 1 【斷缺】一切衆生皆一乘故【斷缺】
- 2 【斷缺】切法無一法不知一【斷缺】
- 3 【斷缺】者即是少聞無法【斷缺】

- 一切衆生皆一乘故佛言法王菩薩善男子能知一法即當知一切法一法不知一切法不知何以故諸法無一相故菩薩聞是一者即是少聞無法不知是名多解何以故一切法性歸一淨故

- 4 【斷缺】見一者即見一切【斷缺】  
 5 【斷缺】之地是一切佛身【斷缺】  
 6 【斷缺】法中斷諸煩惱由【斷缺】  
 7 【斷缺】有人身中毒箭於【斷缺】  
 8 【斷缺】箭痛則不除待【斷缺】  
 9 【斷缺】出復問其箭是誰之射是人苦痛其命已終然拔其箭  
 10 【斷缺】終知無益善男子【斷缺】  
 11 【斷缺】淨諸說清淨離【斷缺】  
 12 【斷缺】常樂我淨故無本【斷缺】  
 13 【斷缺】離道處住無住【斷缺】  
 14 【斷缺】斷故不動不住性【斷缺】  
 15 【斷缺】動大樹恒安一性金【斷缺】  
 16 【斷缺】剪諸煩惱空解【斷缺】  
 17 【斷缺】於此法中求實體【斷缺】  
 18 【斷缺】得生者花菓自出【斷缺】  
 19 【斷缺】此一菓即得無窮之【斷缺】  
 20 【斷缺】中最爲大乘王是【斷缺】  
 21 【斷缺】薩故名法王汝等大【斷缺】  
 22 【斷缺】在在處處持何以【斷缺】  
 23 【斷缺】實清淨【後缺】

見一者即見一切佛身何以故一切佛身從一清淨處生一淨之地是一切佛身一切佛道場一切佛菩提樹善男子於此法中斷諸煩惱由如伐樹唯斷一根不斷枝葉何以故譬如有人身中毒箭於身受痛當即拔箭其痛即除若不拔箭痛則不除待問箭毛羽是何鳥翼復問其竹是何山出復問其箭是誰之射是人苦痛其命已終然拔其箭終知無益善男子心若有垢當即淨心心若在淨即名清淨諸說清淨離諸有取能入無取何以故無本無住處常樂我淨故無本無住真如真實不離一切本離離故性不離道處住無住故與心等一無異不共故不在常處本不斷故不動不住性常一故一亦不一離名數故善男子六風不動大樹恒安一性金剛二見不起有無不在住妙常空慧劍無生剪諸煩惱空解無礙降伏自心魔王不生怨賊不起善男子於此法中求實體者如種一栽不種枝葉但養其根若得生者花菓自出我此少法亦復如是由如一阿摩勒菓種此一菓即得無窮之菓我說此法於諸法中最爲第一於諸乘中最爲大乘王是故此經名爲法王又以此經付囑法王菩薩故名法王汝等大衆持是經者即脫諸難若當持者如在在處處持何以故佛性常於心中常空寂內禪眞實清淨

以上、本小論は、日中の研究者による最新の研究成果を取り入れつつ、前回に續いて、俄藏敦煌文獻中に新たに發見された

一八種(目録番號一つにつき、一種として計上)の禪籍について、簡単ながその概要を紹介することができた。先學の學恩に感謝しつつ、本稿を終えることとする。

註

- (1) 拙稿「俄藏敦煌文獻中に発見された禪籍について」、『禪學研究』第八三號、二〇〇五年一月。
- (2) 前掲拙稿、四一頁參照。
- (3) 『俄藏敦煌文獻』とは、一九九二年二月から二〇〇一年四月にかけて、上海古籍出版社が、いわゆるオルデンブルク・コレクシヨンと呼ばれる敦煌文書のほぼすべてを影印して刊行した、總勢一七冊にもぼる巨大なシリーズのことである。その詳細については、前掲拙稿、一七一―二二頁參照。
- (4) 唐代語録研究班「南陽和上頓教解脫禪門直了性壇語 補校」、『俗語言研究』第五期、一九九八年八月。
- (5) 中西久味『俄藏敦煌文獻 禪籍資料初探』、『比較宗教思想研究』第五輯、二〇〇五年三月。
- (6) 田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究』(大東出版社、一九八三年)と同氏「敦煌禪宗資料分類目録初稿 傳燈・嗣承論」、『駒澤大學佛教學部研究紀要』第二七號、一九六九年)の凡例を參考にした。
- (7) 注1の前掲拙稿、二二丁―二五頁參照。
- (8) 榮新江「敦煌本禪宗燈史殘卷拾遺」、『周紹良先生欣開九秩慶壽論文集』中華書局、一九九七年三月、一三三―一四四頁)。この論文の第二章の抄譯が衣川賢次氏によってなされ、榮新江氏の「俄藏『景德傳燈錄』非敦煌寫本辨」の全譯とあわせて、『ロシア所藏の景傳燈錄』と題し、『禪文化』(第一六一號、一九九六年七月、一三四―一四六頁)に掲載されている。
- (9) 中西氏前掲論文、六四―六六頁參照。
- (10) 前掲拙稿、二七―三〇頁參照。
- (11) 中西氏もこの二種存在を指摘されている。中西氏前掲論文、六九―七〇頁參照。
- (12) 『俄藏敦煌文獻』第二二卷、上海古籍出版社、二〇〇〇年。
- (13) メンシコフ氏が中心となって作成された『ソ連アジア民族研究所藏敦煌漢文寫本注記目録』(一九六三年、一九六七年に分冊刊行した)と題する目録である。第一分冊に一七〇七點、第二分冊に一七〇八號から二九五二號までの二二四四點がそれぞれ收められていて、二冊をあわせると二九五四點の漢文寫本の目録が収録されている。一九九九年にこれら二冊の目録の中國語譯が、上海古籍出版社より『俄藏敦煌漢文寫卷敘録』(上、下二卷)(以下「敘録」と題して刊行された)。
- (14) 田中良昭編『禪學研究入門(第二版)』(大東出版社、二〇〇六年二月)、七八―八〇頁。

- (15) 柳田聖山『北宗禪の一資料』、『印度學佛教學研究』第一九卷第二號、一九七一年。後に柳田聖山『禪佛教の研究』柳田聖山集 第一卷（法藏館、一九九九年）に再録された。
- (16) 田中氏によって確認されたものである。
- (17) 貝葉型の用紙を横にして、左から右へと文字を横書きするという異例な書式をもつものである。敦煌文獻では唯一の例とされている。
- (18) 漢文テキストの完本がいまだ発見されていない。『要決』には、全體にわたるチベット譯『頓悟真宗要決』の研究（『禪文化研究所紀要』第八號、一九七六年）によって明らかにされている。
- (19) 『俄藏敦煌文獻』第二二卷、上海古籍出版社、二〇〇〇年。
- (20) 上山大峻前掲論文、一〇〇頁。
- (21) 西脇常記『ドイツ將來のトルファン漢語文書』（京都大學學術出版會、二〇〇二年）、一三六―一三八頁参照。
- (22) 柳田聖山『絶觀論の本文研究』（『禪學研究』第五八號、一九七〇年）。これは後に柳田聖山『禪佛教の研究』柳田聖山集 第一卷（法藏館、一九九九年）に再録された。同氏『絶觀論』（『禪文化研究所』一九七六年）。
- (23) 中西氏前掲論文、七四―七六頁参照。
- (24) 中西氏前掲論文、七四―七五頁。『俄藏敦煌文獻』第一二卷、上海古籍出版社、一九九九年。
- (25) 中西氏前掲論文、七五―七六頁。『俄藏敦煌文獻』第二二卷（上海古籍出版社、二〇〇〇年）。同第一三卷、二〇〇〇年。
- (26) 中西氏前掲論文、七六頁。『俄藏敦煌文獻』第一四卷、上海古籍出版社、二〇〇〇年。
- (27) 鈴木大拙、校刊少室逸書解説附録『達摩の禪法と思想及其他』（安宅佛教文庫、一九三六年）、同氏『禪思想史研究第二』（岩波書店、一九五一年初版）を参照。
- (28) 田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究』（大東出版社、一九八三年）三四五―三五五頁参照。
- (29) 注28の田中氏前掲書、三四五―三五五頁参照。
- (30) この内の『虚融觀』三巻と『緣起』一巻はいずれも現存しないが、『般若心疏』一巻とは智洗撰『般若波羅蜜多心經疏』のことで、『歴代法實記』と同様に敦煌文獻より発見されたものである。
- (31) 敦煌から発見された浄衆・保唐宗の燈史の書である『歴代法實記』の記述によるものである。
- (32) 拙稿、智洗撰『般若波羅蜜多心經疏』の譯注研究（一）（『駒澤大學大学院佛教學研究會年報』第三九號、二〇〇六年五月）八五―八八頁（参照）。
- (33) 柳田聖山『資州説禪師撰・般若心經疏』考（山田無文老師古稀記念集『花さまざま』春秋社、一九七二年）に収録されたが、後に同氏『禪佛教の研究』柳田聖山集 第一卷（法藏館、一九九九年）に再録された。

- (34) テキストの順序も柳田氏の記述によったものである。同氏注<sup>33</sup>前掲書の三三二、三三二六頁参照。
- (35) 本小論とは直接に關連しないが、龍大本『心經疏』については、小川貫弑氏『般若波羅蜜多心經疏』解題(『西域文化研究 第一』(法藏館、一九五八年)がある。
- (36) 方氏が新たに発見されたS七八二號の書誌學情報については、同氏編著『英國圖書館藏敦煌遺書目録』斯<sup>3381</sup>號、斯<sup>3400</sup>號(宗教文化出版社、二〇〇〇年六月)二二六頁参照。
- (37) 方廣鎔『般若波羅蜜多心經譯注集成』上海古籍出版社、一九九四年。
- (38) 注<sup>36</sup>の方廣鎔氏前掲書參照。
- (39) 注<sup>37</sup>の方廣鎔氏前掲書のこと。
- (40) 注<sup>36</sup>の方廣鎔氏前掲書、四〇三頁參照。
- (41) 『俄藏敦煌文獻』第六卷、上海古籍出版社、一九九六年。
- (42) 『俄藏敦煌文獻』第二三卷、上海古籍出版社、二〇〇〇年。
- (43) 『俄藏敦煌文獻』第二二卷、上海古籍出版社、二〇〇〇年。
- (44) 沖本克己『禪宗史における偏經』『法王經』について(『禪文化研究所紀要』第一〇號、一九七八年)。これは後に同氏の『禪思想形成史の研究』花園大學禪學研究所研究報告第五冊(一九九七年)に再録された。なお、本小論に於いての引用は、すべて後者からのものである。
- (45) 沖本氏前掲論文、二九七頁。
- (46) 矢吹慶輝『鳴沙餘韻解説』(岩波書店、一九三三年)第二部、二五五頁。岡部和雄『禪僧の注抄と疑偽經典』(篠原壽雄、田中良昭編『敦煌佛典と禪』講座敦煌 8 大東出版社、一九八〇年)三六二―三六五頁參照。このほかに、木村清孝氏はその著『初期中國華嚴思想史の研究』(春秋社、一九七七年一〇月、一四四頁)において、『法王經』を華嚴關係の偏經の一つとして取り上げている。
- (47) 現在『大正藏』第八五卷に收められているものはこのS二六九二號によるものである。
- (48) 注<sup>36</sup>の方廣鎔氏前掲書、八五頁參照。
- (49) 勝義『『俄藏敦煌文獻』第十二冊校讀記(上)』(『戒幢佛學』第二卷、二〇〇二年、以下勝義論文)と勝義『『俄藏敦煌文獻』第十二冊校讀記(下)』(『戒幢佛學』第三卷、二〇〇五年、以下勝義論文)の二種の論文である。
- (50) 前掲勝義論文、六〇三頁。
- (51) 前掲勝義論文、六四四頁。
- (52) 前掲勝義論文、四六二頁。